

III 型腸上皮化生の経過観察による早期胃癌診断の向上

Detection of an increased incidence of early gastric cancer in patients with metaplasia type III who are closely followed up: *Rokkas T, et al* (Gut 32: 1110-1113, 1991)

腸上皮化生は一般的に前癌状態と考えられているが良性、悪性両方の状態で認められる。しかし、最近の研究で悪性に分化する腸上皮化生が同定された。そこで今回、早期胃癌発見のマーカーとして腸上皮化生タイプ III を同定することの有効性について検討した。

1976 年から 1987 年の 12 年間に切除された胃癌 718 例のうち早期胃癌 24 例 3.3% を対象とした。最初の

6 年を retrospective study, 後半の 6 年を prospective study で行い、すべての検体は粘液の染色状態により Filipe, Jass の分類に従い、腸上皮化生をタイプ I~III に分類し、タイプ III の腸上皮化生が最初の生検で診断された患者はその後 6~12 か月ごとに follow された。なお、タイプ I は sialomucin を分泌するもの、タイプ II は sialomucin, sulphomucin を分泌するもの、タイプ III は sulphomucin を優位に分泌するものとしている。

結果は、最初の 6 年で全胃癌に占める早期胃癌は 6 例 1.5% であるが、後半 6 年は 18 例 6.4% と危険率 1% 以下で有意差を認めた。また、腸上皮化生タイプ III は、最初の 6 年の早期胃癌 6 例中 6 例 100% に、後半 6 年の早期胃癌の 18 例中 16 例 88%

に認められた。なお早期胃癌はすべて潰瘍型であった。

具体的には後半の 6 年で 2,286 件の生検がなされ、80 例(約 4%)の腸上皮化生タイプ III が見つかり、22 例はそのとき癌の存在を認めていた(早期胃癌は 5 例)。残り 58 例のうち 26 例が follow され、11 例に早期胃癌が確認された。この 11 例の早期胃癌の診断までの観察期間は最初の内視鏡検査から平均 25 か月であった。組織型はほとんどが高度または中等度分化型であった。

以上、著者らは腸上皮化生タイプ III を内視鏡で定期的に follow up すれば早期胃癌の診断が向上すると考えている。

(愛知県がんセンター消化器内科

山近貴輔 抄)